

Sprague, Joey, 2016, "Seeing through Science: Epistemologies," *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences Second Edition*, Rowman & Littlefield Publishers, 33-62.

ジョーイ・スプラグ, 2016, 「科学を通して見る——認識論」

※ () の数字はページ数を、[]内は原文を表す。

レジュメ作成者による紹介文

本稿の著者である Joey Sprague (カンザス大学教授) は、フェミニスト方法論における著名な研究者の 1 人である。本稿は、フェミニスト方法論の入門書として名高い *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences* の第 2 版に収録されている。本稿では、フェミニスト方法論の認識論として、実証主義、構築主義、批判的实在論、スタンドポイント理論が紹介されたのち、スタンドポイント理論の有効性が論じられる。

1. 導入 (33-34)

- 社会学における認識論は、実証主義、構築主義、批判的实在論、スタンドポイント理論の 4 つに大別される。
 - 本稿は、4 つの認識論を概説したのち、フェミニスト方法論にとってスタンドポイント理論が最も有用であると主張する。

2. 実証主義 (34-39)

- 実証主義の立場
 - 実証主義者は、研究における主観的な解釈を排除することによって、真実[truth]を得ることができる考える。
 - 実証主義は、データの収集と分析において体系的な手続きを重視する。その結果、他者による再現と検証が可能となり、客観性が保証される (Barzun and Graff 1970: 222-229)。実証主義者は、批判や議論、さらには反論に開かれた文脈の中で知識生産に参加することができる。
- 実証主義の限界
 - 性別二元論の自明視、性差の強調
 - ◇ 実証主義者は、脳の構成や概念的能力 conceptual ability、道徳上の発達 ethical development における性差に関する仮説を多く提唱してきた (Bleier 1984; Eagly 1995; Fausto-Sterling 1985; Gilligan 1993; Hyde 2005; Tavris 1992)。これらの研究はすべて、二者択一的な性 sex を前提としており、性差が「自然」であることを証明しようとした。

- ◇ 能力の性差を調べた研究のメタ分析によると¹、男女の差よりも個々人の差の方がはるかに大きく、認識される差の多くは文脈的要因によって合理的に説明できることが明らかにされている。それにもかかわらず、性差を強調しようとする研究の傾向は続いている (Hyde 2005)。
- 仮説を成り立たせるための偽装工作
 - ◇ 研究仮説を検証しても期待通りの結果が得られない場合、科学者は必ずしもその仮説を否定するわけではなく、むしろ背景となる仮定をいじり、当初の考えや期待を維持したままデータの意味を理解する方法に到達することが可能である。
 - ◇ 例えば、初期の性差研究者は、「男性は女性よりも知能が高い」と考え、脳の大きさと知能に相関があるという理論を展開し、男性の方が脳が大きいと予測した。その後、女性の方が男性よりも体格に比して脳が大きいことが判明しても、研究者は「男性は女性よりも知能が高い」という仮説を支持する方向で、系統的な性差を示す可能性のある脳の他の側面に焦点を当てて研究を展開した (Bleier 1984; Fausto-Sterling 1985)

3. ラディカルな構築主義——知識は幻想なのか？ (39-43)

- 構築主義の立場
 - ラディカルな構築主義者は、あらゆる秩序や規則性は、経験的な世界において「そこに存在する[out there]」のではないと主張する。むしろ、我々は文化的枠組みを適用することを通じて、我々の知覚に秩序や規則性を与えている (Clough 1993; Mehan and Wood 1975; Weedon 1997)。知識の対象、すなわち私たちに真実として見えるものは、それを「発見」するまさにそのプロセスの創造物に過ぎない (Alcoff 1989; Foucault 1980; Fraser 1989; Haraway 1988)。
 - 構築主義的認識論の最もラディカルな立場は、あらゆる知の対象 (=あらゆる現象や経験) はテキストであり、テキストは複数の相反する意味を持つと主張する (cf. Hawkesworth 1989)。

¹ 石川幹人の整理 (<https://www.isc.meiji.ac.jp/~metapsi/psi/2-9.htm>) によると、メタ分析とは、「分析の分析」を意味し、統計的分析のなされた複数の研究を収集し、いろいろな角度からそれらを統合したり比較したりする分析研究法である。1960年代に社会学者の Robert Rosenthal が、実験者期待効果に関する一連の研究を比較研究する過程で開発した。それ以来、メタ分析は徐々に改良され、今では社会行動学を中心にかなりよく使われる手法となっている。メタ分析の長所は次のような点にある。第1に、1つの研究では見失われていた小さな関係が、多くの研究を統合することで明らかになる。第2に、研究を相互に比較することで新たな視点が得られ、将来の研究の方向づけになる。けれども、メタ分析の使用に関しては、以下の点に注意が必要である。まずメタ分析は、他の研究者の研究データを利用するので、メタ分析者が研究データを誤解し、誤った結論を導く可能性がある。また、異なった動機で収集されたデータ群の中には、違った概念に同じ名前が与えられていることもある。さらに、元の研究データが間違っていると、その影響を受けてしまう点も問題として挙げられる。

- ラディカルな構築主義の限界
 - 社会的現実の無視
 - ◇ 二項対立的なジェンダーは、個人と集団の実践を形作る社会諸制度を生み出し、その結果、複数の社会制度にまたがる女性と男性の生活[lives]が組織される (Acker 2005; Martin 2003; Ridgeway 2011)。そこで組織される生活は、現実的な社会的事実である。しかし、知識は社会的現実と十分な関係を持たない単なるテキストであると主張するラディカルな構築主義は、生活において経験される迫害、経済的剥奪、社会的切り捨てといった厳しい現実を捨象することになる。
 - ◇ ジェンダーや人種、セクシュアリティといったカテゴリーが単なる解釈であると主張する構築主義的立場は、それらのカテゴリーに社会的に位置づけられることによって選択肢を制限されている人々の経験を捉え損ねることになる (Moore 2011)。
 - 政治的無気力
 - ◇ 社会変革のためには、経験や目標意識を共有する集団間の連合が必要である。しかし、経験の分析が単なるテキストや個人の読解とみなされるとき、意味のある社会変革を支える知識の可能性は損なわれ (Fraser and Nicholson 1988; Mascia-Lees, Sharpe, and Ballerino Cohen 1989)、「(構築主義によってもたらされる) 相対主義的諦観は現状維持を強化する」 (Hawkesworth 1989: 557)。
 - ◇ 同時に、社会変革に取り組む責任から切り離された学問は、知識生産者の特権階級が行う一種の知的ゲームに成り下がり、社会的現実と関連性を持たなくなる可能性がある。

4. 批判的实在論 (43-46)

- 批判的实在論の立場(1)——実証主義との相違点
 - 実証主義と同じく、批判的实在論においては、現実是我々の知的生産とは無関係に存在し、それが機能する方法にはパターンがあると理解される (Collier 1994; Frauley 2007; Norris 1999)。
 - 一方で、批判的实在論は、現実[reality]の性質についてより複雑な理解を展開してきた。批判的实在論は、経験的領域 the empirical、実際の領域 the actual、現実的領域 the real という 3 つの領域に分けて、現実を理解することを試みる (Collier 1994, 2005) ²。

² 批判的实在論のコア概念の一つとして挙げられるのが、世界の階層的な位相差を概念化した「三つのドメイン論」である。批判的实在論は、实在のドメイン real domain、現実のドメイン actual domain、経験のドメイン empirical domain の三つを明確に区別することを重要視する。「实在のドメイン」とは深部の生成メカニズムが实在する存在領域を示す。「現実のドメイン」とは、出来事 (事象 events) が現実を生起している实在領域を指す。「経験のドメイン」とは、人間に経験的に把握された限りの事象または事物の領域である (佐藤 2019: 10)。

- 批判的実在論の立場(2)——構築主義との相違点
 - ・ 構築主義と同様、批判的実在論は、知ること [knowing] を社会的プロセスとみなし、知識は社会的産物であるとする。批判的実在論の創始者である Roy Bhaskar は、科学的理論を歴史的に特異な社会的産物であるとし、知識を「推移的」なものとして捉える (Bhaskar 1999: 49)。
 - ・ 構築主義とは異なり、批判的実在論は、知識の対象 [the known] は「自存的 [intransitive]」であり³、それを知ろうとする我々の努力とは無関係に存在すると考える。
- 批判的実在論の限界
 - ・ 批判的実在論は、知ることのプロセスにおいて、研究者と知識の対象 [the knower the known] の関係が社会的・文化的に組織化されていることについては認識しているが、その知識へのアクセスを社会的カテゴリーごとに構造化する社会のあり方についてはほとんど検討しない。
 - ・ しかし、社会学的研究の主要な知的貢献は、ジェンダー、階級、人種を組織する社会関係のシステムが、社会的実践における機会や制約、認識、利害関係といった研究者の属性を形成する上で特に重要であることを実証したことである。次に紹介するスタンドポイント理論は、この点を考慮に入れている。

5. スタンドポイント理論 (47-53)

- スタンドポイント理論の立場
 - ・ スタンドポイント理論は、すべての知識は特定のスタンドポイント standpoint から構築され、ある研究者が見ることができるものは、その研究者の探求が始まる場所によって形作られると主張する。
 - ・ この点を説明するために、スタンドポイント理論の代表論者である Nancy Hartsock (1983) は、資本主義における権力 power の概念化における多様性を例として挙げる。
 - ◇ Hartsock によると、資本主義における権力の概念は、生産手段を所有する資本家のスタンドポイントから発展してきた。資本家は、市場における交換を通じて政治経済と関わるとみなされ、財やサービスの生産に関わる具体的な状況 (例えば労働者との関係性) からは切り離されている。資本家のスタンドポイントから研究することによって、権力はモノや商品として、交換されたり、奪われたり、与えられたりするものとして理解される。

³ 「自存的 intransitive」とは、人間の主観から独立に実在する科学の認識対象の存在性格を指す批判的実在論固有の用語である (佐藤 2019: 4)。その対義語として挙げられる「意動的 transitive」とは、認識の対象ではあるが、主観の外の対象ではなく、あえて言えば内的対象、すなわち、概念や理論などの観念的な思考手段・思考素材の主観的な存在性格を表現している (佐藤 2019: 13)。

- ◇ 他方、マルクス主義者のように労働者の実践的経験から出発する学者は、資本家と労働者の関係における権力の作動に着目する。労働者は、自分の労働力を資本家に売り、他の労働者の労働力と協調して仕事をし、自分が生産する商品の市場価値よりも低い賃金を得なければならない。この関係においては、一方の当事者 (= 資本家) が、富を支配することによって、他方 (= 労働者) を利用し、コンプライアンスを引き出すことができる。労働者のスタンドポイントから権力の分析を始めると、権力を支配の関係として概念化することが可能となる。Hartsock はこの概念化を "power over" と表現する。
- ◇ さらに Hartsock は、女性のスタンドポイントから始めることによって可視化される権力の第三の構造があると主張する。資本主義下の性的分業は、女性を家庭内での家事労働の担い手とし、そのなかで女性たちは、食物や衣服などを作ることを通して家族のニーズを満たす。このような再生産労働に従事する人々 (= 女性) のスタンドポイントから出発すると、能力 capacity あるいは潜在能力 potential としての権力概念を展開することが可能になる。Hartsock はこの概念化を "power to" と表現する。
- スタンドポイント理論の限界
 - ・ 階級とジェンダーに着目して議論を構築した初期のスタンドポイント理論家は、階級とジェンダーに関する社会関係システムを、それぞれ独立したものとして扱ってきたため、その相互作用を捉え損なってきた。
 - ◇ 1970 年代初頭、中産階級の白人女性が、自分たちの経験をすべての女性の経験であるかのように語り始めたことに対し、有色人種の女性たちは反発した。彼女たちは、特権的立場に位置する白人女性が展開している分析は、人種差別、帝国主義、性差別の「三重の危機」に直面している人々の状況を説明するには不適切であると指摘する (Aguilar 2012; Roth 2004)。
 - ◇ Kimberlé Crenshaw (1989) は、人種や性別に基づく差別禁止法が黒人女性の存在を消去していることを指摘し、黒人女性が置かれている状況を表現するためにインターセクショナリティという言葉を作り出した。

6. 批判的实在論かスタンドポイント理論か? (53-60)

- 批判的实在論者とスタンドポイント理論はともに、研究者と知識の対象の関係を社会的に媒介されるものとして捉えるが、その社会的媒介の性質については、意見を異にしている。
 - ◇ 批判的实在論者は、知識の対象へのアクセスに関する社会的構造的差異を考慮せず、研究者を性別、階級、人種によって区別されない unmarked 個人として扱う。一方でスタンドポイント理論家は、性別、階級、人種に関して研究者が置かれている位置が、知識生産における優位性のみならず、偏りや歪みを生み出すと論じる。

- ・ 我々は抽象的な議論のみに基づいて認識論的な選択をする必要はない。本稿では、アメリカ社会学会 (ASA) のセクションを事例としながら、社会学はジェンダー化され、階級化され、人種化されていることを示し、このことを持ってスタンプポイント理論を支持する論拠とする。

7. 社会学のスタンプポイント——社会学者は何を研究するのか (53-54)

- ・ 社会学への女性の参入は、どのような変化をもたらしたのだろうか。
 - ・ 社会学者の優先順位がどのように編成されるかを示す指標として、ASA のセクションにおける会員数のパターンを上げることができる。
 - ・ 2010 年において、ASA の会員数は男女比がほぼ均衡しているが (49%対 51%)、ASA の 49 のセクションのうち、男性比率が 70%以上を占めるセクションが 4 つ、女性比率が 70%以上を占めるセクションが 8 つ存在している。つまり、ASA のセクションの 4 分の 1 近くが男女によって分離されている。

Table 2.1. Sections That Were the Most Sex-Segregated in 2010 (Rank by Size in Left Column)

<i>More Than Two-Thirds Women</i>		<i>n/a</i>	<i>Female</i>	<i>Male</i>	<i>Total</i>	<i>% Female</i>
2	Sex and Gender	12	962	147	1,121	0.87
39	Body and Embodiment	4	229	62	295	0.79
5	Race, Gender, and Class	8	700	191	899	0.79
10	Sociology of Family	3	596	201	800	0.75
27	Children and Youth	1	319	114	434	0.74
34	Disabilities and Society	8	228	94	330	0.71
25	Sexualities	2	307	132	441	0.70
13	Teaching and Learning	7	510	230	747	0.69
<i>More Than Two-Thirds Men</i>		<i>n/a</i>	<i>Female</i>	<i>Male</i>	<i>Total</i>	<i>% Male</i>
33	Marxist Sociology	3	105	230	338	0.69
47	Evolution and Sociology	1	31	126	158	0.80
49	Rationality and Society	2	29	119	150	0.80
42	Mathematical Sociology	5	38	182	225	0.83

- ・ もし、男性会員だけだったら、ASA のセクションはどのような構成になるのだろうか。男性だけの ASA では、最大のセクションは依然として文化社会学に携わる人々で構成されるだろうが、経済 (経済社会学、組織・職業・労働)、政治 (政治社会学、集団行動・社会運動)、比較・歴史分析、理論、宗教などに主な焦点を当てることになるだろう。また、セックスとジェンダー、子どもや若者、女性の仕事に関するセクションは消滅するだろう。

Table 2.3. What an All-Female ASA Would Look Like: Sections with at Least 200 Female Members (Rank Based on Overall Membership in 2010)

<i>Rank</i>		<i>Female</i>	<i>Male</i>	<i>Total</i>	<i>% Female</i>
2	Sex and Gender	962	147	1,121	0.87
5	Race, Gender, and Class	700	191	899	0.79
3	Medical Sociology	661	349	1,019	0.65
10	Sociology of Family	596	201	800	0.75
1	Culture	562	555	1,131	0.50
13	Teaching and Learning	510	230	747	0.69
7	Racial and Ethnic Minorities	494	317	819	0.61
4	Organizations, Occupations, and Work	482	457	943	0.51
9	Sociology of Education	451	354	813	0.56
19	Aging and the Life Course	393	209	604	0.65
20	International Migration	368	203	578	0.64
12	Collective Behavioral and Social Movements	365	394	766	0.48
27	Children and Youth	319	114	434	0.74
11	Political Sociology	312	463	780	0.40
16	Community and Urban Sociology	311	341	658	0.48
18	Crime, Law, and Deviance	308	309	624	0.50
25	Sexualities	307	132	441	0.70
17	Social Psychology	305	321	634	0.49
6	Economic Sociology	301	529	836	0.36
22	Population	290	205	498	0.59
21	Global and Transnational	284	227	515	0.56
8	Theory	280	527	816	0.35
14	Comparative and Historical	273	409	692	0.40
15	Religion	260	421	685	0.38
26	Law	245	188	441	0.57
28	Mental Health	240	172	418	0.58
39	Body and Embodiment	229	62	295	0.79
34	Disabilities and Society	228	94	330	0.71
23	Science, Knowledge, and Technology	224	245	477	0.48
32	Asia and Asian Americans	217	129	350	0.63
24	Environment and Technology	206	252	462	0.45
35	Latino/Latina Sociology	203	118	324	0.63

- ・ では、女性会員だけの ASA はどのような構成となるだろうか。ジェンダーに関する 2 つのセクションが最大勢力となり、健康や医学、家族、教育、人種・エスニックマイノリティなどに焦点が当てられることになる。一方、方法論や数理社会学、マルクス主義や政治経済学に関するセクションは消滅することになる。
- ・ 以上から、会員の興味の対象が性的に分かれており、それは米国の文脈における男女の社会的位置にほぼ対応していることがわかる。

8. 結論——批判的に現実を追求する (60-62)

- 批判的実在論は、研究者の主観が彼らの知識の構築を形づくるという考え方を受け入れているが、そこで止まってしまうのは「批判的である」とはいえない。我々は研究者を、人種、階級、ジェンダーによる不平等を組織する社会的関係において特定の位置に置かれている人々として捉える必要がある。我々は、知るということが、社会的関係や物理的空間における特定の位置から始まること、そしてそれが知識における機会や偏りを意味することを理解する必要がある。そのため、フェミニスト研究にとってスタンドポイント理論が有用であると言えよう。
 - 批判的実在論者は、フェミニストであろうとなかろうと、スタンドポイントの違いを考慮する必要がある。例えば、批判的実在論者の Andrew Sayer は、労働市場における男性と女性の達成度の違いの理由として、男性の方が合理性に秀でていているという点をあげ、資本主義における労働組織がジェンダー化されているという仮説を退けている。もし Sayer が女性のスタンドポイントから出発したならば、女性と男性の間で観察される性格の違いについて、それを、男性的とされる属性をより高く評価し、ジェンダー化された行動を強制する社会システムのメカニズムの結果として理解したかもしれない。
 - Collins (2000) が言うように、認識論の問題は「無害な benign 学問的問題」ではなく、「どのバージョンの真実が優勢で、思考と行動を形成するか」(2000: 203) についての問題である。

【参考文献】(Sprague (2016) に未掲載のものを挙げる。)

佐藤春吉, 2019, 「批判的実在論における実践的認識論と『認識論的相対主義』の意味」『経済系』関東学院大学, 276: 1-20.